立教大学
ボランティアセンター

創立：1874年
学生数：19,521人（大学院含む・2017年5月現在）
池袋キャンパス・新座キャンパス

（池袋）東京都豊島区西池袋3-34-1　5号館1階　TEL.03-3985-4651
（新座）埼玉新座市北野1-2-26　7号館2階　TEL.048-471-6682
volunteer@rikkyo.ac.jp
http://s.rikkyo.ac.jp/volunteer

設立のあゆみ

1926 立教大学におけるボランティア活動の始まりはポール・ラッシュ博士がBSA（聖徒アンデレ同胞会）という祈りと奉仕をモットーとしたグループの立ち上げに遡る

1993 チャペルの諸活動を司るチャプレン室の活動の一環としてボランティアセンター機能を持つ組織が発足

2003 立教大学の押見輝男総長（当時）が「立教大学ヒューマン・ムーブメント」を唱えて、その中の一つとしてボランティアセンターが設立される

ボランティアセンターのミッション

立教大学はキリスト教に基づく建学の精神を具体化したものの一つとして「共に生きる」ことを大事にしています。立教大学ボランティアセンターは「共に生きる」を礎に、学生が他者との関わりや社会的な課題に取り組むことを通して、人間としての成長とよりよき社会の実現を目指す意志の育成を図ります。

年間活動状況

2017.04	ボランティアオリエンテーション
	ボランティアWelcome week　（5月にも開催）
	陸前高田市立第一中学校「感謝の合唱ミニコンサート」開催
05	ボランティアOne dayプログラム
06	海外ボランティア講座Ⅰ　「夏休みボランティア」セミナー
	ボランティアプレサミット（11月にも開催）
	ボランティア・カフェ（以降7、10、11、12、1月にも開催）
07	日本文化理解講座「留学生のための能楽体験ワークショップ」
	鴎友学園女子中学生職場体験
08	近隣の学童保育の子どもたちを大学へ招待するイベント
	一貫連携教育・立教学院 清里環境ボランティアキャンプ
	筑波大学附属桐ヶ丘特別支援学校への授業協力
09	夏季フィールドワーク　農業体験 in 山形県高畠町
10	南魚沼市立栃窪小学校交流・お米販売
	海外ボランティア講座Ⅱ　「夏の活動報告会」
12	バリアフリー映画上映会「だれでも楽しい映画会」 ボランティア メサイア招待
2018.02	災害救援ボランティア講座（～3月）
03	ボランティアサミット

■立教大学ボランティアセンターとは

「共に生きる」
主体的かつ自立的に人々や自然と共に生きる視点を持つことで、はじめて自分自身を取り巻く社会や環境を理解することが出来ます。

総長室社会連携教育課課長
立教サービスラーニングセンター
立教大学ボランティアセンター
佐藤 一宏氏

STEP1

設立までの経緯

脈々と受け継がれてきたボランティアの精神

立教大学のはじまりは1874年、米国聖公会のチャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が東京築地に聖書と英語（英学）を教える私塾をはじめ、「立教学校」と称したのがスタートです。実学的風潮が非常に強かった時代に、知識を単に習得するのではなく、真理を探求し、他者と生かし合う学びの場とする大学であるという特徴を持っていました。この考え方が今のボランティアセンターの源流にもなっています。

立教大学ボランティアセンターの設立は2003年です。当時の総長である押見輝男氏が「立教大学ヒューマン・ムーブメント」を唱えて、その一つの具現化がボランティアセンターの設立に繋がったともいえます。「立教大学ヒューマン・ムーブメント」は上下・強弱の関係を捨て、手助けを求める人と手助けが出来る人がお互いを尊重しながら協働していくといった人間的尊厳と共生・共存の重要性を自覚して人間的な成長を求めようとするムーブメントです。これは立教大学が掲げてきたキリスト教に基づく人格の陶冶という目標の実践にも繋がっています。

2003年以前にも立教大学にはボランティアに関連する活動の長い歴史と幅広い実績がありました。ポール・ラッシュ博士の奉仕活動に代表されるチャペル（大学付き礼拝堂）の学生キリスト教団体の活動から始まり、学生が中心となって実践してきた学内外の正課外教育プログラム、校友会、卒業生のレディスクラブが行った留学生支援など多種多様な活動が挙げられます。立教大学のボランティアセンターは、それらの伝統・実績を土台としながら単に既存の諸活動を整理・統合したのではなく、改めて立教大学が教育責任をもってボランティア活動に主体的に関わることを学内外に示したものといえます。

ボランティアセンタースタッフ（一部）
総長室社会連携教育課課長 佐藤一宏氏（中央）
新座キャンパス・ボランティアコーディネーター 関口いづみ氏（右）
池袋キャンパス・ボランティアコーディネーター 大澤万里子氏（左）

STEP2

センター設立

「共に生きる」を理念に学生支援のハブ的役割を担う

2003年に設立されたボランティアセンターの前身として、立教大学の建学の精神を具現化する部署の一つとしてチャプレン室（大学の中の礼拝堂を管理・運営する部署）の中に、1993年にボランティアセンターの機能をもつ小規模な組織が設置されました。具体的な活動としては日本の中でボランティアという言葉が定着するようになった1995年の阪神淡路大震災で、立教大学でも学生を中心とした実行委員会を作って支援を行いました。それから2年後の1997年、北陸地方沿岸などに被害を及ぼしたナホトカ号重油流出事故で行った学生ボランティアの支援活動もこの組織が受け皿となっています。そういった流れを軸に着実に力をつけていきました。約10年間に渡る様々な活動を経て、2003年に立教大学ボランティアセンターが設置されることになりました。

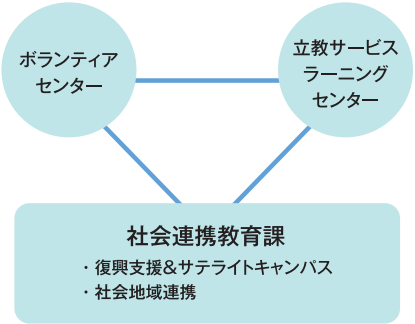
長い歴史の中で立教大学は常に「共に生きる」ことを大事にし、正課教育の授業と共にボランティアを含めた正課外教育を重視しながら学生たちが教室の中での学びに留まらず、様々な形で社会に出て活動することを奨励してきました。

「単にボランティアのニーズがあるので、それに学生をマッチングさせるというレベルにとどまらず、「共に生きる」という理念に基づいてボランティアというものを考え、様々な活動を展開してきたのが、立教大学ボランテイアセンターの特色だと思います」と社会連携教育課長の佐藤一宏氏は話します。さらに佐藤氏は、「2016年度から、立教サービスラーニング（RSL）との連携や社会地域連携活動も加わったことで往還的な学びの機能が増してきたということができます。立教大学ボランティアセンターは、本学学生支援のハブ的役割を担いながら、学生の成長を支援していきたいです」と話します。

STEP3

活動と成長

他大学には見られない立教大学ボランティアセンターの大きな特色は、立教ラーニングスタイル（立教大学の教育の仕組み）の意義に照らして設立された立教サービスラーニング（RSL）センターと相互連携・協力を通じて、学生の社会における体験的な学びを正課・正課外教育の両面から一体的に推進していくところにあります。



「ボランティアセンターの一つの役割は学生の支援です。一人ひとりに徹底的に寄り添う使命があります。なぜボランティアを行いたいのか？何に興味があるのか？学生と色々な話をゆっくりしていきます。それによって学生たちが気が付かない課題や迷いを明確にしていきます。結果的に学生にとって本当に必要なフィールドを一緒に考えることができるのです。必要に応じて外部のNPOや両キャンパスのたくさんのボランティアサークルとも連携を取り、マッチングを行います。もちろん大学内にも様々なプログラムがあります」とボランティアコーディネーターの関口いづみ氏は話します。学生それぞれの課題を解決できるように支援を行うのもセンターの役割であり、時には学生相談所やしょうがい学生支援室、学生部や国際センターとの連携も行っています。

学生部だけでボランティア活動を支援している大学が多い中、立教大学ではボランティア活動の歴史が長く多様化しているのが強みといえます。学部の中でも正課外教育プログラムが増え、143年の立教大学の歴史に育まれてきた考え方・精神・実践が現在に繋がっているといえます。それらを踏まえて作成したボランティアセンターのミッションステートメントは、教職（教員と職員）協働の作業として意見を交換しながら創り上げたものです。

ボランティアセンターの目指すもの

関口氏は「学生がボランティアセンターを訪れることが、社会に目を向け視野を広げるきっかけに繋がればいいし、ボランティアを通じて体験や経験することが人間形成の軸になってくれればなお嬉しいです」と話します。

「学生たちとの話の中で、学生自身が無意識に社会に対する漠然とした不安や違和感を感じていることに気付くことがあります。どの学生も、ボランティアの現場を通じて新しい世界に出会ったり、現状を変えるきっかけを見つけることもできます。

また、『ボランティア活動の中で社会との接点を見つけ大きな気付きを得ることができた』という学生の言葉からもそのことがうかがえます。学生たちが自分の足で社会の入り口に立てるよう、寄り添いながら背中をちょっと押してみる、そんな仕事がコーディネーターの役割ではないでしょうか」と、関口氏は話します。

ボランティアコーディネーターの役割

「今、力を入れているのはボランティアセンターに来てもらうきっかけ作りです」と話すのはもう一人のボランティアコーディネーター大澤万里子氏。

「何をしたいのか？を学生と話をしていく中で、一番ふさわしいであろうフィールド、プログラム、団体を紹介していきます。教育機関として彼らが育ち自分自身を見つけていく場所でありたいと常に考えています」と大澤氏。また外部の団体と連携を取りながら、ボランティアとして学生を必要としているのはなぜなのか？といった視点で情報収集・整理を行っていると大澤氏は話します。

ボランティアセンターの活動以外にも立教大学ではさまざまな正課外教育プログラム※を実施しています。

※事務部局や外部が行う授業以外のプログラムの総称

- ボランティアセンター
- 学生部
- しょうがい学生支援室
- 復興支援本部
- ボランティアサークル
- チャペル
- 立教サービスラーニングセンター
- 国際センター
- 人権センター
- 学部
- 学外ボランティア団体プログラム

取材者の目

立教大学ボランティアセンターは、長い歴史のある中、既にあった前身組織を超える存在として誕生

背景に

- **総長が提唱した「立教大学ヒューマン・ムーブメント」活動**
- **正課教育と共にボランティア活動等の正課外教育を重視する考え方**

VOLUNTEER PROGRAM

■「共生」・「協働」を学ぶオリジナルプログラム

体験を言葉にする

4月には新入生向けにオリエンテーションでボランティアとは何か？といった基本的な紹介とボランティア学生団体の活動紹介が行われます。またボランティア活動が多くなる春・夏休み前にボランティアに対するより深い理解を促す各種セミナーが開催されます。ボランティアに参加する際には「一人ひとりが、立教大学の代表者としての自覚を持つ」といった心得を事前に確認し、フィールドの様子をコーディネーターが噛み砕いて伝えています。

立教のボランティアセンターならではの取組として、清里環境ボランティアキャンプ（2泊3日）と山形県高畠町で行っている農業体験（5泊6日）があり、どちらも事前と事後研修を踏まえたプログラムになっています。すでに13回の実績がある清里環境ボランティアキャンプは、立教学院各校の小・中・高校生、大学生たちが共に取り組む環境保護活動です。学生はその中でリーダーを務めます。環境保護の専門家とプログラムを考え、作り、実践していく楽しみもあります。一方、農業体験は30年近い歴史があり、学部も学年も違う学生が5泊6日という日程を共にし「共生」・「協働」を学ぶ機会にもなっています。この2つのプログラムは自然環境だけではなく「他者」と関わることで「自分」と向き合える恰好の機会になっています。

清里環境ボランティアのようす

高畠農業体験

ボランティア・カフェ

これらキャンプの事前研修では、そのプログラムの意義に加え、「なぜ自分は参加するのか？」「それによって何を得るのか？」といった確認を行います。学生からは事前研修により受け身の体験に終わらない貴重な時間になったという声が多く寄せられています。事後研修では他の学生の意見や感想を聞いて学んだり、自分の発表を通じて自己を客観的に見つめることが出来たという声もあります。研修が終わった後にも、日を空けて事後研修会として、プログラムに参加した仲間との体験を通じて何を得たか？といった話し合いを行っています。同じプログラムの中で、価値観の違いや異なる考え方の相互理解を行うことは、これから社会に羽ばたいていく学生にとっても貴重な体験になるといえます。

体験を共有するボランティア・カフェ

今年で3年目を迎えるボランティア・カフェは、ボランティアを経験した学生がまだボランティアを経験していない学生と体験談を共有する場。学生の言葉で体験を聞き、話す側も自分の体験を客観的に整理できたり感想を聞くことができるメリットがあります。ランチタイムに少人数で行い徐々に参加者も増えています。現在は月に1～2回。夏や春休みのボランティア参加の多くなる時期の後は毎週のように開催しています。

REPORT

■活動紹介

「だれでも楽しい映画会」バリアフリー映画上映会

立教大学バリアフリー映画上映会「だれでも楽しい映画会」は、障害の有無に関わらず、だれもが共に楽しむことができる映画会です。近年、一般の映画館でもバリアフリー対応での上映が増えてきましたが、立教大学では2009年から毎年、新座キャンパスで開催しています。通常視覚障害者の方だけがヘッドフォンで聴く音声ガイド（原稿の一部は学生が作成）を来場者全員にスピーカーで聴いていただいたり、上映作品に関係する会場掲示、文章の読み上げや手話通訳をしたり、触って体感できる展示物の制作を通して、より映画を楽しめる様々な工夫をしています。また、休憩時には参加者全員によるストレッチタイムを設け、車いすの方の体が痛くならないように配慮したり、最寄り駅から大学まで移動のサポートをするなど、バリアフリー映画上映会の可能性をみんなで模索しながら実施しています。最近では小さなお子さん連れの方も楽しめるスペースも用意されています。

バリアフリー映画上映会
台詞の合間に視覚情報を「言葉」に変えて伝える音声ガイド班。

バリアフリー映画上映会
音声を文字情報に変えて伝える文字通訳を本番に向け練習中。

今年度も池袋・新座キャンパスの学生によって構成される学生実行委員会が組織され、春から作品選びを始め、点訳パンフレット作成、手話通訳、文字通訳、音声ガイド、移動サポートなどに取り組み、だれもが1つの作品を一緒に楽しむ映画会を目指し活動しています。この組織のもう一つの特徴は、普通のサークルではなく「学生実行委員会」であるところです。この映画会の運営の中心を担う学生を中心に、普段はそれぞれに違う専門的な活動をしている手話サークルや放送研究会の学生たちや障害のある学生のサポートをしている学生たちが積極的に関わり協力し合いながら、それぞれの技術を磨き楽しい映画会になるよう準備をしています。

「これからも広く市民の皆さん（特に、映画に行きにくい生活状況下にある方々）に来場を呼びかけ、一緒に映画を楽しむことを通して一人でも多くの方に笑顔を届けたい、地域貢献の一助となりたいと考えています」と活動に参加する石田智哉さんは今後の展望を語りました。

映画上映会に関わる中で得られるもの

現代心理学部2年
石田智哉さん

様々な人々との〈繋がり〉を得ました。学部や学年を越えた出会いや大学職員、お客様として来ていただく地域の方々、専門的な技術をもった方々など。今年は広報とともに文字通訳と音声ガイド制作に携わっています。文字通訳はペアを組んで司会部分の文字化を行い、広報班ではどのような人に本上映会の情報を届けるかを意識し、自分たちの活動をより多くの人に知ってもらえることもあわせ様々な媒体を通して取り組んでいます。音声ガイド制作は今年度から始まり、専門的な技術をもつ人に教わりながら一部、制作を行いました。映画の情景を言葉で的確に表現していくとても奥の深いものだと感じています。そして、専門家との出会いによって、新たな観点を知ることができ、多くの学びになっています。

VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

■学生ボランティアの意義とは

成長するための場ではなく、そのきっかけを与えてくれる場

人とのつながり、温かさ、人手不足が著しい農業の現実、仲間意識、絆、自分自身について。期待していた以上に、学ぶものがあり、たくさんのことを吸収することができました。そこには人のために頑張りたいと思う自分、単純作業を楽しんでいる自分、きれいな景色に素直に感動している自分がいました。

法学部3年
西原 実穂さん

自分自身の中にある新しい私を発見できました。

39人の小学生と6泊7日のキャンプに参加しました。こんなにも多くの子どもたちと関わることなどこれまでは決して考えられませんでした。素直な自分、子どもが好きな自分、面倒臭がり屋な自分…といった発見。ここで得られたものは全く新しいものではなくて、自分への気付きなのかもしれません。

コミュニティ福祉学部3年
植村 亮太さん

学生と共に歩むセンターでありたい。

総長室社会連携教育課課長
立教サービスラーニングセンター
立教大学ボランティアセンター
佐藤 一宏氏

2016年度から、立教サービスラーニングセンターとボランティアセンターが協力・連携しながら活動していくことになったのは、大きな出来事です。それは正課と正課外の両面から学生を支援していく教育の実践です。立教生の「成長支援センター」として、専門的かつ包括的な活動を展開していきます。

立教大学ボランティアセンター編集後記

ボランティア活動の長い歴史と実績がある中で、立教大学ボランティアセンターが設立されました。ここに、立教大学がこれまで以上にボランティア活動を通じた学生の成長に責任をもって取り組むという姿勢がうかがえます。それが立教サービスラーニングセンターとの連携という正課教育と正課外教育をつなぐ特徴的な組織構成に現れているといえます。

早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

創立：1882年10月21日
学生数：53,240人（2017年5月1日時点）
早稲田キャンパス、戸山キャンパス、西早稲田キャンパス、喜久井町キャンパス、日本橋キャンパス、東伏見キャンパス、所沢キャンパス、本庄キャンパス、北九州キャンパス

東京都新宿区戸塚町1-103　99号館早稲田STEP21 2F　TEL：03-3203-4192
wavoc@list.waseda.jp
https://www.waseda.jp/inst/wavoc/

設立のあゆみ

2002.04	WAVOC設立。オープン科目3科目
2003	WAVOCの活動を担う客員講師（インストラクター）を採用 オープン科目6科目
2005	「国境を超える教育的社会貢献活動」文部科学省の特色GPに採択される オープン科目12科目
2011	全学共通副専攻「社会貢献とボランティア」開始
2013	「社会貢献・ボランティア活動を通じた人材の育成」プロジェクト開始 公認プロジェクト制度スタート、課外活動補助金制度の活用開始
2014	体験の言語化プロジェクト開始 科目「体験の言語化」を開講
2017	WAVOCの教員の専門性を活かし、その指導のもと活動する5つの早稲田ボランティアプロジェクト（ワボプロ）が始動。公認サークル（ボランティアカテゴリー）の創設と対象団体への支援を開始。「ボランティア・アドバイザー制度」を開始

ボランティアセンターのミッション

私たちは、早稲田大学が果たすべき社会的責任のうち、社会貢献活動の推進役を担っています。様々な科目やボランティアプロジェクトの運営を主体に、学生が社会的問題に気づき、考え、行動することを促し、今日、そして将来の社会貢献活動を担う人材を育成しています。

- **WAVOC は社会と大学をつなぎます。**
- **WAVOC は体験的に学ぶ機会を広く提供します。**
- **WAVOC は学生が社会に貢献することを応援します。**

WASEDA BEAR は漫画家の弘兼憲史氏（1970 年法学部卒）の作品です。

年間活動状況

2017.04	ボラカフェ（新歓）
05	ボランティアプレゼンコンテスト
06	国内・海外渡航団体向けリスク管理セミナー
07	スタディツアー等
08	公認プロジェクト渡航等活動 語学ボランティア講座
09	中高生ボランティアプログラム
10	早稲田芸術週間（各団体出展）
11	早稲田祭（各団体出展）
12	ワボプロ成果報告会 プロジェクト交流企画 海外渡航団体向けリスク管理セミナー 学生企画ボランティアサミット
2018.01	公認プロジェクト・公認サークル（ボランティア）説明会
02	公認プロジェクト渡航等活動 スタディツアー等
03	新年度準備

※スタディツアー・公開講座・公開セミナー・シンポジウムは一年を通して随時開催

■早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンターとは

気づき、考え、行動する。
社会貢献活動で先頭に立つ人材を育成します。

早稲田大学
平山郁夫記念ボランティアセンター
准教授　岩井 雪乃氏

STEP1

設立までの経緯

ボランティア推進組織として WAVOC は生まれました

早稲田大学は、1882年の建学以来、教育、研究、社会貢献を使命としており、国際的な社会貢献活動を行う卒業生を多く輩出しています。また、意識の高い学生も多く、ボランティア活動に取り組むサークルもボランティアセンター設立以前から多数ありました。しかしながら、社会貢献の推進役を担う部署は当時まだありませんでした。そこで、その役割を担って設立されたのが平山郁夫記念ボランティアセンターです。2002年の設立当時は総長室所管でしたが、2015年9月に学生部に組織移管されています。

ボランティアセンターの設立に影響を与えた人物として欠かせないのが、同センターの名称にも記載される名誉博士（当時東京芸術大学学長）平山郁夫氏です。平山氏は平和ボランティア運動として世界の文化遺跡の保存に尽力する傍ら、学生のボランティア活動の支援にも惜しみなく力を捧げていました。その国際的社会貢献活動の精神を受け継ぎ、ボランティア活動を通して地域社会・国際社会に貢献していくことを目的として平山郁夫記念ボランティアセンター（以下WAVOC ※WAseda VOlunteer Center）は設立されました。また、社会的にもNPO法人や市民活動グループの活動が期待される状況となったこともあり、早稲田大学におけるこれまでの活動実績や社会の要請に応える流れが設立への後押しになっています。

WAVOC組織図

- 所長（理事）
- 副所長
- 【教員】
  - 准教授2名
  - 講師（任期付）4名
- 【事務職員】
  - 事務長
  - 専任職員3名
  - 嘱託職員2名（科目・広報）
  - 派遣スタッフ2名（経理・庶務）
- 学生スタッフ5名

独立採算制を目指し資金不足のスタート

WAVOC設立のおよそ1年前。初代所長となる奥島孝康総長（当時）と平山郁夫氏との間でボランティアセンターの必要性が話されました。海外の大学視察が行われ、中でもスタンフォード大学で行われていた“サービスラーニング（ボランティア活動と学習を統合する）”という取組は、WAVOC設立に向けて大いに参考になりました。

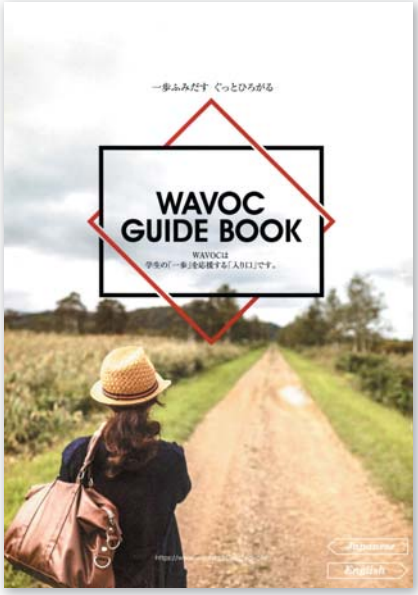
そして、2002年に総長室所管の組織としてWAVOCはスタートしました。センターの設立は当初から順調だったわけではなく、事務長1名、専任職員1名というマンパワー不足という問題や、そして何よりも「独立採算制」を目標としていたため資金が足りませんでした。結果、HP作りや、広報、プログラム作りなどに翻弄され、電話受付まで他部署の協力を仰ぐ日々。そんな中、いくつかのエポックメイキングなイベントにより少しずつ、WAVOCが学内外に認知されていきます。

海外ボランティアの先駆けに

卒業生でもある小田和正さんによる大規模なチャリティーコンサートを協賛を得て開催したのは、2003年の出来事でした。この年、インストラクター（後に講師／任期付）を1名採用します。

そしてWAVOCがその足場を固めたのは、2005年。国境を超える教育的社会貢献活動が文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されました。この採択により、海外ボランティアに本格的に参入する先駆けになったと同時に、単位の取れるボランティア科目という流れを確立しました。この年にはインストラクター（後に講師／任期付）も3名となっています。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター准教授 岩井雪乃氏（中央）、専任職員の針生 彩氏（右）・飯島宣基氏（左）



「WAVOC GUIDE BOOK」WAVOCでは学生に、実社会において学ぶ機会を提供することをスローガンに掲げている。

STEP2

活動と役割

科目とプロジェクトの往還

WAVOCの設立に際し、当初からあった考えは「科目とプロジェクトの往還」でした。正課である全学オープン科目を展開するとともに、課外活動であるボランティアプロジェクトを支援することで、科目から得た知識を現場に活かし、現場の活動で得た経験を教室に持ち帰ることにより、さらなる学びを深めることを可能にしています。

全学オープン科目では様々な社会的課題の解決に向けて行動を起こすための知識や情報、そして実践手法を学び、実習での現場体験はもちろん、ボランティア論や政策提言など「行動する」ことにつながる実践系科目を増やしてきました。WAVOCが生まれた年には3科目でしたが、毎年着実にオープン科目を増やしており、2010年には18科目になりました。

WAVOCは早稲田大学の教育、研究に次ぐ使命である社会貢献活動の推進役を担っています。その取組は学生に対してボランティア活動などの情報提供・仲介をするだけではなく、実社会での体験を通して学ぶ機会を提供していくことに主眼を置いています。

そのため、科目として単位を取得できるものもあれば、単位にならないプロジェクトも数多く展開しています。また、活動地でのボランティア活動だけではなく、活動から戻った後、「振り返り」の実施にも力を入れており、現場の解決していくべき課題を“自分事”としてとらえるように指導し、次の活動につながるようにサポートしています。

一般的なボランティアセンターは、ボランティアをしたい人と、してほしい人をつなぐマッチング機能が主ですが、WAVOCでは当初からプロジェクトと科目の２本柱により、社会貢献を担う人材を育てることを主眼に置いています。また、ボランティア活動では、机上で学んだことを実践の場で確認し、活用すると同時に、様々なパートナーとの協働、活動の企画立案、チーム運営などを通じて、人間力を養うことで、社会で活躍するための素地を作ることができると考えています。実際、WAVOCのプロジェクト活動は、学生が主体です。

単位となる「正課科目」と課外活動の「プロジェクト」で構成されるボランティア活動を展開し、年間約14,000人にのぼる参加者が活動しています。

インストラクターの役割

WAVOCでは、ボランティアの現場での専門的知識や経験が必要になった場合に、コーディネーターと呼ばれる人に指導を委託しています。また、いわゆるコーディネーターに近い役割としては、インストラクター（現在では講師／任期付）がいます。インストラクターの役割はボランティアのマッチングというよりは、ボランティアそのもののプロジェクトを考え、運営していくことです。

STEP3

新たな展開

現在の…そしてこれからのWAVOC

2005年以降、軌道に乗り始めたWAVOCではプロジェクト活動の停滞を回避するため様々な施策を推し進めてきました。常に新しい活動を学生たちにWAVOCが示していく必要があったからです。当初より活動のメインとなっていた全学オープン科目も数を増やしていっただけではなく変化しました。2011年には学部や学年、専攻分野を問わない早稲田大学全学部生が履修可能な全学共通副専攻「社会貢献とボランティア」を開始しました。講義形式の科目に加え、講義で得た知識を実社会での体験を通して深める「体験的実習科目」を展開しています。

2014年には、ボランティアを一過性の体験で終わらせず、学生の「生き方」に根づくようにするために、科目「体験の言語化」も展開しています。

WAVOCの支援（WAVOC公認プロジェクト、学生部公認サークル（ボランティア））

WAVOCは2013年度より公認プロジェクト制度を設け、公募で任意の学生ボランティア団体を書類選考・面接した上でWAVOC公認プロジェクトとして活動を認めてきました。公認プロジェクトは、WAVOCの支援を受けながら、学生と現地のカウンターパート、教職員、卒業生が協働し、国内外で活動しています。毎年春に行うボランティアプレゼンコンテストでは、全公認プロジェクトが集まり、テーマに沿ってプレゼンテーションを行い、早稲田サポーターズ倶楽部（本学の教育・研究活動に伴う各種事業への財政的支援制度）から寄付された総額100万円を順位に応じて活動報奨金として獲得できます。また2017年度からは学生部の約600の公認サークルのうち、ボランティアカテゴリーに属する公認サークルに支援を始めています。ボランティアプレゼンコンテストにも、2017年度初めて公認サークル（ボランティア）の団体が出場し、報奨金も獲得しています。WAVOCはこれからも学内外においてボランティアの裾野を広げて行くために、様々な取組と学生に対する支援を行っていきます。

早稲田大学
平山郁夫記念
ボランティア
センター
飯島 宣基氏

教員と学生がタッグを組んで取り組む「ワボプロ」

さらに、2017年４月から始まったのが「早稲田ボランティアプロジェクト（通称ワボプロ）」です。「ワボプロ」では、専門性を持つ教員それぞれの指導のもとで「狩り部（活動地：千葉県鴨川市）」「パラリンピック・リーダープロジェクト（活動地：主に東京）」「actあくと～他者の支えになる演劇プロジェクト（活動地：東京都八王子市）」「Bridge-Right of the Child-（活動地：カンボジア）「海士ブータンプロジェクト（活動地：島根県海士町/ブータン）」の５つの団体が現在活動し、学生の成長をサポートしています。教員の専門性と学生の情熱と行動力の融合によって、新しい活動を生み出そうとしています。

また、同時期の2017年4月に学生支援のための新しい制度として「ボランティア・アドバイザー制度」をスタート。現在、6名の教員がボランティア活動に関する相談を受ける時間を設け、より多くの学生が社会に貢献できる人材となるよう支援を充実させています。

早稲田大学
平山郁夫記念
ボランティア
センター
針生 彩氏

取材者の目

「科目とプロジェクトの往還」による人材育成

- スタンフォード大学を視察し参考に
- 全学科目で課題解決の知や手法を学ぶ
- 得た知識を実践で活かし、その経験を教室に持ち帰り学びを深化

VOLUNTEER PROGRAM

■野生動物との共存をめざす「狩り部」

猟師さんから罠の仕掛け方の指導をうける

早稲田ボランティアプロジェクト（通称：ワボプロ）は、WAVOCの教員がもつそれぞれの専門性を活かし、その指導のもと活動を行います。活動地への貢献にとどまらず、学生自身が主体性を持って取り組み、成長していくことをサポートします。「狩り部」はその一つです。

近年、日本の農村では狩猟の担い手を求めています。猟師の育成が国の政策となっているほどです。その背景には、イノシシ・シカ・サルなどの動物が畑を荒らす害獣になっていることと、過疎高齢化が進む農村において猟師が不足していることが挙げられます。そこで、農業そのものや被害の実態を学び、今、大学生にできることを模索しています。場所は千葉県鴨川市。指導は地元の猟師さんや農家さん。現場では害獣用の罠を仕掛けたり、猟師さんが仕留めた害獣を捌き、食物になっていく過程を学びます。活動はそれだけに限らず、東京に戻って狩猟の実態を知ってもらう啓発イベントも実施。2〜3ヵ月に1回（1泊2日）のペースで、現在9名の学生が参加しています。

このボランティアプロジェクトの担当教員は岩井准教授です。専門の教員が組んだプロジェクトだからこそ、現場に、より踏み込んだ経験ができ、その背景にあるものがしっかり学べる内容になっています。ワボプロにはそんなプロジェクトが揃っています。

獣害対策ネットをはるための支柱を打つ

イノシシを運ぶ

イノシシの解体に挑戦

シカの解体に挑戦

【狩り部に参加して】バンビが肉になったとき

2回目の現地活動で、猟師さんの罠に運よく鹿がかかり、銃によると畜の現場に立ち会わせてもらいました。私はそれまで、と畜や害獣の駆除など、生物の命を奪うことはやむを得ないことだと思っていました。けれど鹿が死ぬ瞬間はさすがに直視できませんでした。獣害対策は、猟師や農家の方から国家の政策まで、いろいろなレベルで取り組まれていることです。狩り部で目にした生々しい実態を踏まえて、それらを考えていきたいと思います。

法学部1年　後藤 歩さん

VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

■学生ボランティアの意義とは

プロジェクトに参加して広がった価値観

WAVOCの活動に参加する以前、僕はとても矮小な世界の中にいました。中学のころから続けていたバレーボール。大学入学後も引き続いて所属したバレーボールサークルの練習が授業と重なり練習に行けなくなったとき、僕の世界の大半が欠けてしまいました。そんな時に友人に誘われて参加したWAVOCのプロジェクト「まつだい早稲田じょんのびクラブ」は、新潟県十日町市松代地域の過疎化の進んだ集落に密着し、住人と交流し、地域活性化に取り組む活動をしています。

初めは田舎に行きたいという単純な理由から始めたものの、現地の人々やサークルの面々、今まで知りえなかった人たちとの出会いで、自分の視野の狭さや、生きていた世界の狭さを実感しました。WAVOCは狭い世界から抜け出すきっかけだと思います。

基幹理工学部
3年
大橋 優人さん

社会への当事者意識を育てれば、卒業後も行動はつながっていきます

平山郁夫記念ボランティアセンター
准教授 岩井雪乃氏

最近の学生からは、「ボランティアは自己満足だ」という声をよくききます。そんな斜に構えた学生でも、やってみたらのめりこんでしまうプログラムを作る努力をしています。そして、その活動が「学生時代の楽しい思い出」で終わらないように、その課題に対する当事者意識を育む授業「体験の言語化」も実施しています。当事者意識が根づけば、卒業してからも、社会を変える行動が続いていきます。そんな人材育成を目指しています。

**早稲田大学
平山郁夫記念ボランティアセンター
取材後記**

早稲田大学ボランティアセンター（WAVOC）の設立当初は、マンパワー不足と独立採算制による資金不足が大きな課題。しかしチャリティーコンサート開催や文部科学省からの資金により、現在につながる体制を固めてきました。「科目とプロジェクトの往還」という考え方のもと、学生の学びを深化させ、多様な活動を展開しています。